

[資料] 三重県尾鷲市九鬼町の紀州九木浦庄屋記録に記された 5件の津波記事, 及び愛媛県今治市菊間町の加茂神社の記録に記された 1854年安政南海地震記事について

関西大学 社会安全学部* 服部 健太郎

Five Reports on Tsunamis Recorded in the Documents of Kishu Kukiura Syoya in Kuki Town, Owase City, Mie Prefecture, and the Report of the 1854 Ansei Nankai Earthquake Recorded in the Document of Kamo Shrine in Kikuma Town, Imabari City, Ehime Prefecture

Kentaro HATTORI

Faculty of Societal Safety Sciences, Kansai University, 7-1, Hakubai-cho, Takatsuki-shi,
Osaka, 569-1098 Japan

First, we focused on the documents, owned by Kyusyu University library, on the earthquakes and tsunamis in Kuki-cho, Owase City, Mie Prefecture on Kii Peninsula. These documents recorded the five tsunamis of the 1677 Enpo Boso-Oki Earthquake, the 1703 Genroku Earthquake, the 1707 Hoei Earthquake, the earthquake of 19 January 1717 (Kyoho 1) and the 1771 Yaeyama Earthquake (Meiwa 8). In particular, we found the first description about the 1717 earthquake that generated a tsunami. Second, we introduced the documents, owned by Kamo Shrine on the 1854 Ansei Nankai Earthquake in Kikuma-cho, Imabari City, Ehime Prefecture.

Keywords: the 1677 Enpo Boso-Oki Earthquake, the 1703 Genroku Earthquake, the 1707 Hoei Earthquake, the earthquake of 19 January 1717, the 1771 Yaeyama Earthquake, the 1854 Ansei Nankai Earthquake.

§1. はじめに

本研究では、紀伊半島の九木浦(三重県尾鷲市九鬼町(図1(a), (b))の記録に記された5つの津波の記事と、愛媛県今治市菊間町(図1(a), (c))の記録に記された1854年安政南海地震の記事を紹介する。合わせて、既刊資料との差異を簡単に説明する。

§2. 三重県尾鷲市九鬼町の史料『紀州九木浦庄屋記録』

九州大学附属図書館が、『紀州九木浦庄屋記録一』(文書番号D-49, 別名『豊隆一代記』), 『紀州九木浦庄屋記録二』(文書番号D-50, 別名『珍隆老代記』), 『紀州九木浦庄屋記録三』(文書番号D-51, 別名『秀隆老代記』)という写本を所蔵している[九州大学九州文化史研究所(1958)124頁]。これら3史料は、九鬼家歴代当主の事績及び当時の出来事を編年体で記したものであり、デジタルアーカイブ(九大コレクション)にて閲覧可能である。『豊隆一代記』『秀隆老代記』から、計5点の津波記事が得られた。

2.1 九州大学附属図書館所蔵『豊隆一代記』における津波の記述

『豊隆一代記』(『紀州九木浦庄屋記録一』, 九大コレクション:<http://hdl.handle.net/2324/1572741>)のうち、津波に対応する4箇所の画像とその翻刻を図2-5に示した。九大コレクションにおけるコマ数を併記した。

まず延宝五年十月九日(1677年11月4日)の記事(図2)には、九木浦及び近郊の早田浦(三重県尾鷲市早田町, 図1(b))へ津波が襲来したことが書かれている。延宝五年十月九日夜五ツ時(1677年11月4日22時頃)に発生し、磐城から房総にかけて津波をもたらした1677年延宝房総沖地震[宇佐美・他(2013)]の津波記事の可能性がある。尾張や紀伊にも津波が及んだとされ[神田(1962), 羽鳥(1975)], その根拠として、『玉露叢』[武者(1941a)884頁]の記述「(延宝五年十月九日)同日尾州御領紀州御領右

* 〒569-1116 大阪府高槻市白梅町7-1
電子メール: kenta777k@ace.ocn.ne.jp

同断」(内閣文庫所蔵『玉露叢』[請求番号]150-0083, [冊次]0015, コマ 70)が知られている。なお「右同断」は、津波のことを指している。

次に元禄十六年十一月二十二日の記事(図 3)には、九木浦・早田浦及び近郊の二木島(三重県熊野市二木島町, 図 1(b))への津波襲来が書かれている。『伊藤良氏書簡』[都司(1981a)38 頁;東京大学地震研究所(1989)135 頁]にて、「第二分家の宮崎氏著」からとして引用されている箇所と同じである。都司(1981b)が指摘したように、元禄十六年十一月二十二日丑刻(1703 年 12 月 31 日午前 2 時頃)に発生した元禄地震[宇佐美・他(2013)]の津波が紀伊半島を襲ったことを示す。

宝永四年十月四日の記事(図 4)には、地震の時刻は午の上刻から中刻、津波の時刻は午の下刻からとなっている。宝永四年十月四日未刻(1707 年 10 月 28 日午後 2 時頃)に発生した宝永地震[宇佐美・他(2013)]の記事である。

享保元年十二月六日の記事(図 5)には、「子刻」の地震・津波が書かれている。享保元年十二月六日子刻は 1717 年 1 月 18 日午後 12 時頃、すなわち 1717 年 1 月 19 日午前 0 時頃である。この津波については、既刊の史料集に見えない。一方地震は、既に知られている享保元年十二月六日夜子刻(1717 年 1 月 19 日午前 0 時頃)の有感地震[宇佐美(2020)]と同日同刻であった。この地震は、武者(1941b)280 頁、東京大学地震研究所(1983)142 頁、東京大学地震研究所(1988)354 頁、東京大学地震研究所(1992)177 頁、宇佐美(1999)936 頁、宇佐美(2012)142 頁に史料が掲載されている地震であり、広く近畿地方で感じられた。伊藤(2005)が文化五年十月十七日(1808 年 12 月 4 日)の事例で示したような、紀伊半島で記録された小津波の一つの可能性もある。

2.2 『豊隆一代記』と既刊資料[宮崎(1970)]の比較

九鬼家の歴史を扱っている宮崎(1970)には、第 13 代当主の豊隆(1658-1734)に関する記述(54-66 頁)がある。この記述と『豊隆一代記』との関係は不明であるが、内容は類似している。

宮崎(1970)において津波の 4 事例のうち、延宝の事例(55 頁)については延宝五年ではなく「四年」とされている。次に、元禄の事例(57 頁)については廿二日ではなく「廿三日」とされている。宝永の事例(57 頁)については地震の時刻が、午の上刻～中刻ではなく、

午の上刻～申の刻となっている。享保の事例(61 頁)は、年月日が一致しているが、時刻の記載がない。

2.3 九州大学附属図書館所蔵『秀隆老代記』における津波の記述

『秀隆老代記』(『紀州九木浦庄屋記録 三』, 九大コレクション:<http://hdl.handle.net/2324/1572743>)より、明和八年三月十日四ツ頃(1771 年 4 月 24 日午前 10 時頃)の津波に関する記述を、図 6 に示す。1771 年八重山地震(同日辰刻(午前 8 時頃)[宇佐美・他(2013)])によって本州にもたらされた津波と推定される。これまで知られている本州の津波記録の地点は、千葉県の館山(同日昼四ツ時(午前 10 時頃))[東京大学地震研究所(1983)778 頁]と高知県の室津(同日、時刻不明)[宇佐美(1998)152 頁]であった。

以上述べてきた 5 つの事例について、『豊隆一代記』『秀隆老代記』における年月日時を表 1 に示す。和暦は算用数字で示した。

§ 3. 愛媛県今治市菊間町の史料

『菊間町誌』[菊間町誌編さん委員会(1979)]49 頁に、1854 年安政南海地震に関する記述が含まれている。東京大学地震研究所(1987)2036 頁-2037 頁に転載されている。菊間町の加茂神社(図 1(c))における記録が元になっている。

3.1 加茂神社所蔵『菊間賀茂宮記 永常』(嘉永五-安政四)における 1854 年安政南海地震の記述

加茂神社(愛媛県今治市菊間町)において、所蔵文書 17 点が含まれた 1 箱を調査した(表 2 の「直接調査した史料」の列に対応)。池内[1965]附録に収められた「加茂神社々記池内家記目録」に記載の史料情報(表題・年代)を元に表 2 を作成した。なお番号は便宜的なものである。19 点のうち 17 点は目録にも見えるものであった(表 2 の「目録[池内(1965)]に載る史料」の列に対応)。一方、番号 10, 番号 11 の 2 点は目録に見えないが、箱の中には収められていた。

表 2 のうち、『菊間町誌』49 頁に記された『池内永常記』と思われるものが、番号 17 の『菊間賀茂宮記 永常』(嘉永五-安政四)である(図 7)。表紙の画像・翻刻を図 7(a)に示し、1854 年安政南海地震に関する安政元年十一月四日～七日(1854 年 12 月 23 日～26 日)の記述の史料画像・翻刻を図 7(b)に示す。七日以降も記述は続くが、省略した。なお四日の「少々震」は、1854 年安政東海地震の菊間における

有感記事と思われる。

3.2 『菊間賀茂宮記 永常』(嘉永五-安政四)と既刊資料『菊間町誌』の比較

『菊間町誌』49 頁には安政元年十一月四日(1854年12月23日)以降の菊間における地震の記述がある。その中に、『池内永常記』なる記録からの情報として、安政元年十一月五日夕七ツ(1854年12月24日午後4時)の大地震が記されている。この部分が、図7(b)の翻刻のうち、五日の記述と類似している。この『池内永常記』は、『菊間賀茂宮記 永常』(嘉永五-安政四)であるのかもしれない。

3.3 他の地震の記録

他に、『菊間賀茂宮記 永常』(嘉永五-安政四)には、安政二年正月十八日～二十一日(60丁表)の地震の記述も見られた(図8(a))。また、『池内石見守常存記録 一卷』(文化8-15年)(表2の6番目)に見られた文化年間の3つの地震の記述を図8(b)-図8(d))に示した。

このうち、図8(b)は文化九年三月十日(1812年4月21日)の土佐の被害地震(番号:225)[宇佐美・他(2013)]、図8(d)は文化十一年十月十一日(1814年11月22日)の土佐高知の被害地震(番号:227)[宇佐美・他(2013)]のことであろう。

§4. おわりに

三重県尾鷲市九鬼町を襲った1677年延宝房総沖地震、1703年元禄地震、1707年宝永地震、1717年1月19日午前0時頃の地震、1771年八重山地震の計5件の地震の津波について検討した。原史料と思われる九州大学附属図書館蔵『豊隆一代記』及び『秀隆壱代記』の画像を確認し、翻刻を紹介した。

また愛媛県今治市菊間町の加茂神社の所蔵記録を調査し、安政南海地震をはじめとする地震記事について検討した。

謝辞

第39回歴史地震研究会(高槻大会)にて口頭発表した内容(O-08)が元になっています。図1(a)の作成にGMT[Wessel and Smith (1991)]を用い、歴史地震の震央のプロットには『理科年表2023』[国立天文台(2022)]記載の数値を用いました。図1(b)、図1(c)の作成に国土地理院の淡色地図(<https://maps.gsi.go.jp/d>

velopment/ichiran.html)を用いました。加茂神社(愛媛県今治市菊間町)所蔵文書の閲覧について、今治市役所にお世話になりました。加茂神社の池内あゆみ宮司に文書閲覧・画像掲載のご許可を頂き、閲覧・写真撮影をさせて頂きました。池内隆広様に閲覧の便宜をはかって頂きました。京都大学の片岡樹教授に、菊間町域についてご教示頂きました。『紀州九木浦庄屋記録』は九州大学附属図書館の九大コレクションにて閲覧し、画像掲載の許可を頂きました。『玉露叢』は国立公文書館デジタルアーカイブにて閲覧させて頂きました。査読者の都司嘉宣氏、編集委員の行谷佑一氏の懇切なご助言により、本論文は大きく改善しました。ここに記して感謝します。

対象地震:1677年延宝房総沖地震、1703年元禄地震、1707年宝永地震、享保元年十二月六日子刻(1717年1月19日午前0時)の地震、1771年八重山地震、1854年安政南海地震

文 献

- 羽鳥徳太郎, 1975, 房総沖における津波の波源 : 延宝(1677年)・元禄(1703年)・1953年房総沖津波の規模と波源域の推定, 地震研究所彙報, **50**, 83-91.
- 池内克水, 1965, 郷土研究 3 史実の探究 遍照院文書をめぐる著述の考証, 60 pp.
- 伊藤純一, 2005, 文化五年十月十七日(1808.12.4)四国・紀伊半島で記録された小津波, 歴史地震, **20**, 65-73.
- 神田 茂, 1962, 延宝5年10月9日の津浪地震と房総沖を震央とする大地震, 地震, 第2輯, **15**, 143-145.
- 菊間町誌編さん委員会, 1979, 菊間町誌, 菊間町, 436 pp.
- 九州大学九州文化史研究所, 1958, 九州文化史研究所所蔵古文書目録 第3(写本編目録), 136 pp.
- 国立天文台, 2022, 理科年表 2023, 丸善出版, 1178 pp.
- 宮崎道生, 1970, 中和一由遺稿集 第1巻 歴史編(九鬼家歴代略記), 宮崎道生, 253 pp.
- 武者金吉, 1941a, 増訂大日本地震史料, **1**, 文部省震災予防評議会, 945 pp.

武者金吉, 1941b, 増訂大日本地震史料, **2**, 文部省
震災予防評議会, 756 pp.

東京大学地震研究所(編), 1983, 新収日本地震史
料, **3**, 961 pp.

東京大学地震研究所(編), 1987, 新収日本地震史
料, **5**, 別巻 5-2, 2528 pp.

東京大学地震研究所(編), 1988, 新収日本地震史
料, 補遺, 1222 pp.

東京大学地震研究所(編), 1989, 新収日本地震史
料, 補遺別巻, 992 pp.

東京大学地震研究所(編), 1992, 新収日本地震史
料, 続補遺, 1054 pp.

都司嘉宣, 1981a, 紀伊半島地震津波史料, 防災科
学技術研究資料, **60**, 392 pp.

都司嘉宣, 1981b, 元禄地震・津波(1703-12-31)の下
田以西の史料状況, 地震, 第2輯, **34**, 401-411.

宇佐美龍夫, 1998, 日本の歴史地震史料 拾遺, 512
pp.

宇佐美龍夫, 1999, 日本の歴史地震史料 拾遺, 別
巻, 1045 pp.

宇佐美龍夫, 2012, 日本の歴史地震史料 拾遺, 5ノ
上, 625 pp.

宇佐美龍夫・石井 寿・今村隆正・武村雅之・松浦律
子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京
大学出版会, 724 pp.

宇佐美龍夫, 2020, 日本歴史地震総表, 宇佐美龍夫,
491 pp.

Wessel, P. and W. H. F. Smith, 1991, Free software
helps map and display data, EOS Trans. AGU,
72, 441-446.

加茂神社(愛媛県今治市菊間町)所蔵『菊間賀茂宮
記 永常』(嘉永五-安政四)

加茂神社(愛媛県今治市菊間町)所蔵『池内石見守
常存記録 一卷』(文化八-十五)

史料

九州大学附属図書館所蔵『紀州九木浦庄屋記録
一』(別名『豊隆一代記』), 文書番号:D-49, <http://hdl.handle.net/2324/1572741> (九大コレクション)

九州大学附属図書館所蔵『紀州九木浦庄屋記録
三』(別名『秀隆老代記』), 文書番号:D-51, <http://hdl.handle.net/2324/1572743> (九大コレクション)

内閣文庫所蔵『玉露叢』(冊次 0015), 請求番号 150
-0083, <https://www.digital.archives.go.jp/img/3946233>(国立公文書館デジタルアーカイブ)

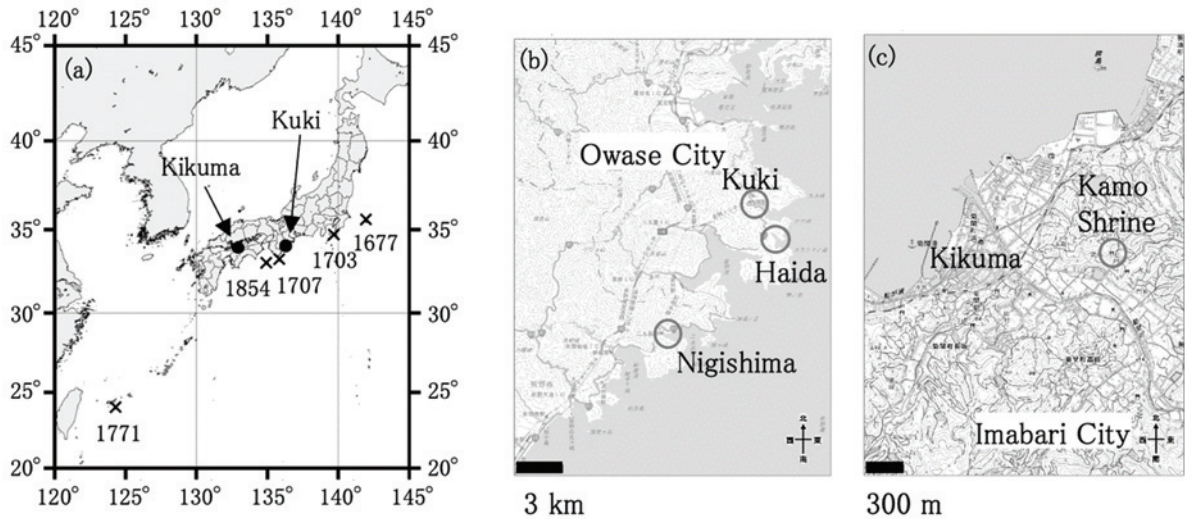


図1 (a) 日本地図. (b) 三重県尾鷲市九鬼町の位置. (c) 愛媛県今治市菊間町の位置. (a)はGMT[Wessel and Smith (1991)]により描き, 震央は国立天文台(2022)による. (b)(c)は国土地理院の淡色地図に加筆.

Fig. 1 (a) Map of Japan. (b) Location of Kuki-cho, Owase City, Mie Prefecture. (c) Kikuma-cho, Imabari City, Ehime Prefecture. (a) is drawn by GMT [Wessel and Smith (1991)] and the cross marks are based on NAOJ (2022). (b) and (c) are based on light-colored base maps provided by the GSI.

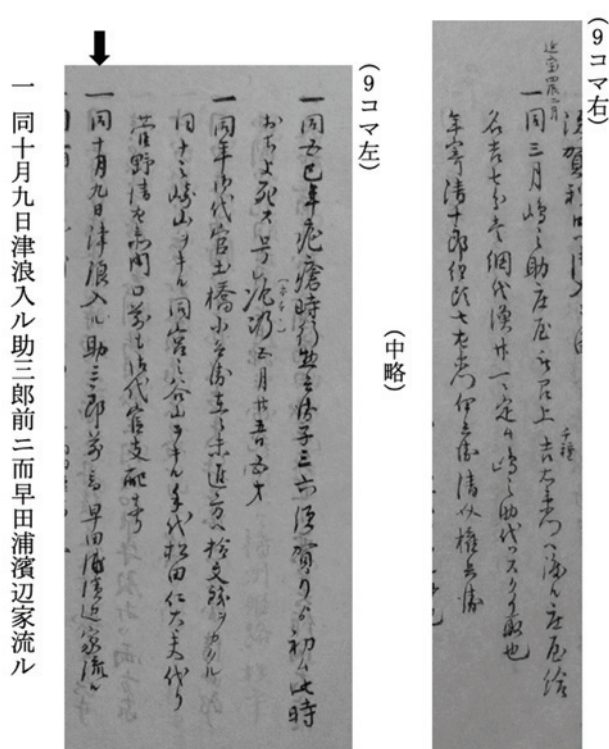


図2『豊隆一代記』(九州大学附属図書館所蔵)に記された延宝五年十月九日(1677年11月4日)の津波記事. 原文(右)に付けた矢印の箇所から翻刻(左)は開始している.

Fig. 2 The original texts of Toyotaka Ichidaiki, owned by Kyushu University Library, with an arrow (right) and their reprints (left) on the tsunami of the 1677 Enpo Boso-Oki Earthquake. The reprints (left) begins at the point (right) indicated by the arrow.

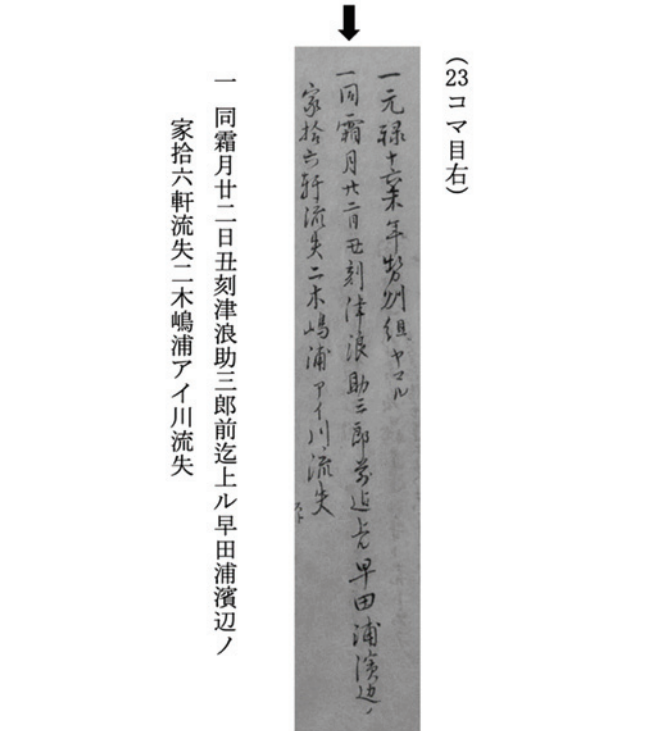


図3『豊隆一代記』(九州大学附属図書館所蔵)に記された元禄十六年十一月二十二日丑刻(1703年12月31日午前2時頃)の津波記事. 原文(右)に付けた矢印の箇所から翻刻(左)は開始している.

Fig. 3 The original texts of Toyotaka Ichidaiki, owned by Kyushu University Library, with an arrow (right) and their reprints (left) on the tsunami of the 1703 Genroku Earthquake. The reprints (left) begins at the point (right) indicated by the arrow.

一 同十月大四日ミツノへ午ナル神ヨシ大名ケンブク日ナリ同日午ノ上刻ヨリ中刻迄大地震同下刻ヨリ高浪上ル清四郎後ニテ久太夫エヒスダナへ上ル西ハ左右衛門ニハマデ奥ハ弥六家ノ後マデ清四良又三郎惣五郎吉作新田悉ク流ル東ハ助六家六三郎ニハマデコナジハ源之丞田マテ家数六十四軒舟五艘網カズ五帖地下人山海トモニ無事他國へ行くモノモブジ氏神天神ノ御加護故へト寺百姓彦兵衛女房山ニテ死ス

(26コマ右)
ノ御加護故へト寺百姓彦兵衛女房山ニテ死ス

一 同十月大四日ミツノへ午ナル神ヨシ大名ケンブク日ナリ同日午ノ上刻ヨリ中刻迄大地震同下刻ヨリ高浪上ル清四郎後ニテ久太夫エヒスダナへ上ル西ハ左右衛門ニハマデ奥ハ弥六家ノ後マデ清四良又三郎惣五郎吉作新田悉ク流ル東ハ助六家六三郎ニハマデコナジハ源之丞田マテ家数六十四軒舟五艘網カズ五帖地下人山海トモニ無事他國へ行くモノモブジ氏神天神

(25コマ目左)

(中略)

(25コマ目右)
一 宝永四ヒトノ亥年徳マキノ方亥子ノ間二月小キトノ卯ニツツ二月セツブン

図4『豊隆一代記』(九州大学附属図書館所蔵)に記された宝永四年十月四日午刻(1707年10月28日午後0時頃)

の地震・津波記事。原文(右)に付けた矢印の箇所から翻刻(左)は開始している。

Fig. 4 The original texts of Toyotaka Ichidaiki, owned by Kyushu University Library, with an arrow (right) and their reprints (left) on the 1707 Hoei Earthquake and its tsunami. The reprints (left) begins at the point (right) indicated by the arrow.

一 同十二月六日子刻地震浪少々奥ノ新田へ入米穀亦次第高直

(41コマ目右)
一 享保元十月三日甲子日此氣上日岩岩ニ東山ノ新田後日計の得生利未ふお同十九日死骸ノ足長石末の後ハ火クハ来ル
一 同霜月廿八日戌刻ノ明午刻迄大西風伊豆灘ニ上下廻船多損不同月善石末ノ時収帳出シ一類皆煩々若石末ノ善カノ如果次舟ノ三月迄時外
一 同十二月六日子刻地震浪少々奥ノ新田へ入米穀亦次第高直

図5『豊隆一代記』(九州大学附属図書館所蔵)に記された享保元年十二月六日子刻(1717年1月19日午前0時頃)の地震・津波記事。

原文(右)に付けた矢印の箇所から翻刻(左)は開始している。

Fig. 5 The original texts of Toyotaka Ichidaiki, owned by Kyushu University Library, with an arrow (right) and their reprints (left) on the earthquake of 18 January 1717 and its tsunami. The reprints (left) begins at the point (right) indicated by the arrow.

(66コマ目左)
一 明和卯三月十日階層岐金屋羅(素指立)依屋屋初元元文一老若同様助助字在末の権柄(素指)付在入任并奈足直上京名所一見大坂より金屋羅(素指)又大坂(此内)十日船中名所(和歌山)三井寺(野野)吉野(間)帳(初)元元文一(素指)多志(館)行勢(素指)本(和)掛(口)取(之)指(素指)日(三)月(日)廿(五)日(素指)在(末)也
一 同三月十日四ツ頃大浪三打参るさ、浪と云田海後ハ浪入左太夫木戸口迄波入宇右衛門畑崩る我等ハ出立之跡ニ而長嶋へ舟ニテ参候へ共長嶋辺ハ左様之事なし早田杯ハ多ク波入国々表上作米四拾八九匁位名吉漁なし我等麦五俵余取る

図6『秀隆一代記』(九州大学附属図書館所蔵)に記された明和八年三月十日四ツ(1771年4月24日午前10時頃)の津波記事。原文(右)に付けた矢印の箇所から翻刻(左)は開始している。

Fig. 6 The original texts of Hidetaka Ichidaiki, owned by Kyushu University Library, with an arrow (right) and their reprints (left) on the tsunami of the 1771 Yaeyama Earthquake. The reprints (left) begins at the point (right) indicated by the arrow.

表1 紀州九木浦庄屋記録に記載されている津波記事5点の年月日時
Table 1 The dates of the five tsunamis recorded in the documents of Kishu Kukiura Shoya

和暦					西暦			
元号	年	月	日	時	年	月	日	時
延宝	5	10	9	—	1677	11	4	—
元禄	16	11	22	丑	1703	12	31	2時
宝永	4	10	4	午下～	1707	10	28	13時～
享保	1	12	6	子	1717	1	19	0時
明和	8	3	10	四	1771	4	24	10時

表2 今回検討した加茂神社の史料の一覧

Table 2 List of the documents of Kamo Shrine examined in this study

番号	表題 ¹	年代 ¹	直接調査した史料	目録[池内(1965)]に載る史料	地震の記述
1	加茂大明神諸記	慶長-宝暦	○	○	-
2	池内石見守将常一吉諸記	宝暦四-天明六	○	○	-
3	池内陳常一吉諸記 上巻	天明六-寛政十	○	○	-
4	池内陳常一吉諸記 中巻	寛政十-文化六	○	○	-
5	池内陳常一吉諸記 下巻	文化七-文化八	○	○	-
6	池内石見守常存記録 一卷	文化八-文化十五	○	○	○
7	池内石見守常存記録 二巻	文化十五-文政十	○	○	-
8	池内石見守常存記録 三巻	文政十一-天保七	○	○	-
9	池内石見守常存記録 四巻	天保八-天保十五	○	○	-
10	自弘化二年正月至四年十二月 菊間賀茂宮記録 池内常存 菊昶 ²		○	-	-
11	自弘化四 ^五 戊申正月至嘉永五壬子年七月 菊間賀茂宮記録 池内常存 菊昶 ²		○	-	-
12	池内石見一生記録	天明五-安政五	○	○	-
13	賀茂宮寄進物集記	寛政七-文化元	○	○	-
14	菊間賀茂宮記 常慎	天保十二-天保十三	○	○	-
15	菊間賀茂宮記 常慎	天保十四-弘化四	-	○	? ³
16	菊間賀茂宮記 常慎	弘化五-安政四	-	○	? ⁴
17	菊間賀茂宮記 永常	嘉永五-安政四	○	○	○
18	菊間賀茂宮記 永常	安政五-文久三	○	○	-
19	菊間賀茂宮記 永常	文久四-明治元	○	○	-

1:目録[池内(1965)]に見える史料の表題・年代は、目録の表記に従った。

2:目録[池内(1965)]に見えない史料。神社における調査の結果、表紙に記載されていた表題を記入した。

3:所在不明であり、直接確認できていない。地震記事の有無は不明。

4:所在不明であり、直接確認できていない。地震記事の有無は不明。『菊間町誌』49頁において安政南海地震の記録の出典とされた『加茂社記』であるとする、地震記事があるのかもしれない。

『菊間賀茂宮記 永常』（嘉永五-安政四）

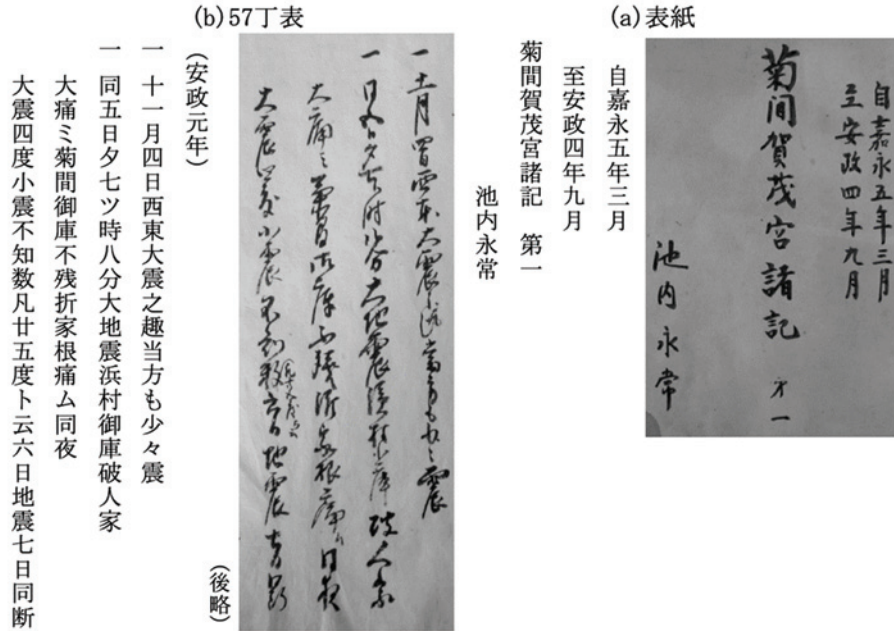


図7 加茂神社所蔵『菊間賀茂宮記 永常』（嘉永五-安政四）に記された1854年安政南海地震の記事。(a) 史料表紙 (b) 安政元年十一月四日～七日

Fig. 7 The original texts (right) and its reprint (left) of (a) the cover of the document and (b) the description of the 1854 Ansei Nankai Earthquake.

『池内石見守常存記録 一卷』（文化八-十五）

『菊間賀茂宮記 永常』（嘉永五-安政四）

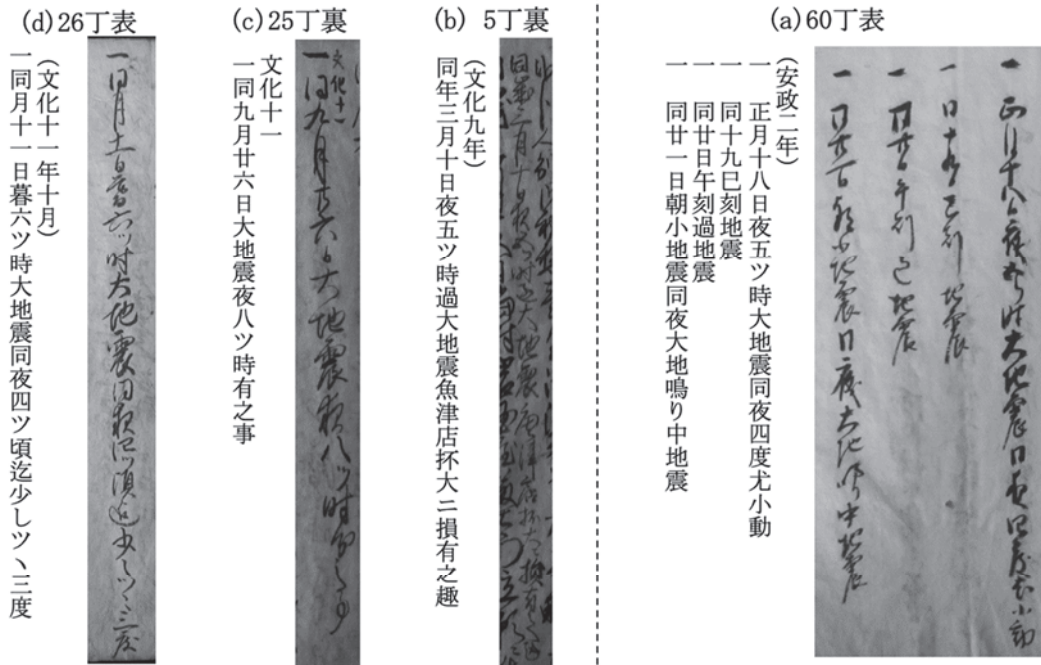


図8 加茂神社所蔵『菊間賀茂宮記 永常』（嘉永五-安政四）及び『池内石見守常存記録 一卷』（文化八-十五）に記された地震の記事。(a) 安政二年正月十八日～二十一日 (b) 文化九年三月十日 (c) 文化十一年九月二十六日 (d) 文化十一年十月十一日

Fig. 8 Descriptions of the two documents of Kamo Shrine on earthquakes in Kikuma of (a) 6 to 9 March 1855, (b) 21 April 1812, (c) 7 November 1814 and (d) 22 November 1814.